戦争挑発政治への反撃こそ、世界が当面する最重要課題

鈴木頌
2025 年 6 月 5 日

いまのところはそう思う。トランプも最大の帝国主義国の指導者として、その一味であることは間違いない。
ただしこの方向へ向かってさらに突き進むか否かについては、支配層の中に深刻な矛盾が生じつつある。この選択を巡っては、これまでの保守／リベラルの構図は役立たない。
現実に生じている巨大な人的犠牲と殺りく・破壊の状況を一刻も早く止めること、それにとどまらず、国と国、正義と正義が暴力的に向き合う世界をなくし、「非戦」の原理を国際社会の根本にすえることがもとめられている。
そのためには特定の価値観を敷衍するのではなく、具体的事実、とくにウクライナ問題とイスラエル問題とに現れた具体的な矛盾を注意深く検討し、それに基づいて対処すべきである。

１．戦争挑発政治こそ現代世界の最も危険な敵

Warmonger は最近の国際政治で盛んに使われる言葉であるが、学術的に正確な訳語はまだない。ここでは戦争挑発政治と呼ぶことにする。

戦争挑発政治の中核に座るのは米国の軍産複合体だ。これに国務省、国防総省内のタカ派テクノクラート、連邦議会のお抱え議員集団が加わる。その勢力は一括してネオコン（新保守主義）と呼ばれる。

> ネオはニューと同義ではない。「蘇った」というニュアンスが加わる。だから日本語では「新生」というのがふさわしいが、あまりにも膾炙してし

まったためそのまま使う。ただしそのニュアンスには留意してほしい。ネオリベラリズム、ネオナチズム、ネオ・ファシズムなど、多くが歴史修正主義の匂いを振りまいている。

そして世界政治でその一翼を担うのは NATO・ウクライナとイスラエルだ。彼らは尻尾だが、往々にして胴体を振り回す。

２．ネオコンが戦争を常態化するまで

ネオコンはもともとは決して保守本流ではない。東西対立時代を通じて外交戦略の中心を担ってきたのは勢力均衡（BOP）論者であった。ケナンの封じ込め理論に始まりマクナマラ、キッシンジャーと続く系列は、いまと同じように戦争と陰謀に明け暮れていた。しかしそれは、一定の軍事・政治バランスを前提として東西対立の枠内で安定させること、東西の勝負は経済でつける路線が貫かれていた。

東側陣営の崩壊後、根本的な地殻変動が進み、これにより生じた権力の空白を誰がどう埋めるかが問われるようになり、やがてそれは血を血で洗うような激しい闘争の時代に突入した。やがて闘争の時代の主役となった軍産複合体は、政治の表舞台に進出し、世界秩序の根本的改造を求めるようになった。

権力の空白地帯として狙われたのは、第一に旧東欧世界であり、第二に中東のアラブ民族主義政権であった。
目標となったのがユーゴでありイラクであった。その尖兵となったのがネオコンであった。勝利に味をしめた人々は次々に新たな敵をもとめ、なければメディアとの共謀で敵を作り出した。

これまでの経済競争に代えて、武力による権力簒奪が優先的な手段となった。それはもはやたんなるネオコンではなく、Warmonger による世界支配体制だ。

３．超党派の Warmonger グループの形成

９０年代にタカ派グループが民主・共和の垣根を超え広がり始めた。米国の覇権復活はまず、通貨支配と軍事支配を通じて進められた。それは議会の翼賛化とロビー支配を通じて強化され、メディアがそれを後押しした。

これが、戦争を自己目的化し、価値観（人権・自由）を度外れに強調することで批判を排除し、圧殺した。こうして政府・議会・ロビー・メディアから構成される事実上の「情報独裁システム」を構築するに至った。
その典型例をいま我々は、ガザでのジェノサイド・ホロコーストを認め、批判派を社会のあらゆる場所から排除する政府・議会・メディア複合体に見ることができる。

４．ネオリベラリズムにも責任の一端はある

今日の戦争挑発政治の直接のきっかけは、東西世界の大勢が崩壊した後の権力の空白地域を誰が獲得するかという話にある。それは社会主義世界とも一定の関係を保ちながら、独自の世界を築いてきた非同盟諸国にも及んでいる。

アメリカ・NATO・イスラエルという帝国主義枢軸が、自らのシステムのうちに世界を治めたいという欲望が駆動力となっている。ただしこの欲望そのものは、Warmonger の専売特許ではなく、帝国主義社一般が所有する。

そのシステムとは 1980 年前後から始まったネオリベラリズムとグローバリズムである。中でも資本の自由化（証券化）と変動相場制（為替の自由化）、国債市場の格付けが新興国を羽交い締めにした。日本まで含んで、世界中の国に「失われた十年」が広がった。
Michael Hudson はこういう事象を帝国主義のグレードアップと考え、「超帝国主義」と名づけている。

これについては、しばらくおいておこう。帝国主義であろうと、超帝国主義であろうと、それだけでは戦争挑発政治の出現は考えられない。まずは旧東欧社会の崩壊と旧第三世界の存立基盤の弱体化によって生じた権力の空白を誰が獲得するかという、特殊な世界史的状況を把握することだ。

５．まずは平和と人命が大事だ

もちろん中長期には戦争や制裁の原因となる経済的な不平等の改善が重要だし、BRICS のような新興国を巻き込む国際関係の発展は大いに希望をもたせる。

欧州列強のような大国でも、戦争挑発政治と対米従属からの脱却と多極型システムへの復帰は可能だし、イスラエル問題ではかなり具体的な動きが見られるようになっている。

人の命がかくも容易く投げ捨てられる時代が、かくも長く続くことに、暗然たるものを感ぜずにいることは、もはやできないであろう。何よりも、欧米流の規範に合わないものに対して、なんとかフォビアという感情を爆発させ、敵視することから物事を始めるのは、ほとんど病的な反応であろう。

願うらくはウクライナ、イスラエルという具体的課題から出発して
Warmonger の軛を解き放ち、当たり前の、せめて平凡な暮らしが送れるように、そのような社会を作りたいものである。

（了）